

【研究ノート】

日本海海戦、戦闘開始までの無線電信利用

大野哲弥

OHNO, Tetsuya

キーワード：日露戦争；連合艦隊；対馬海峡；通信

Received: 2011. 10. 31

1. はじめに

日本海海戦時の無線電信交信状況については、吉田昭彦や中村治彦の研究により概要が明らかになっている¹⁾。吉田によるとバルチック艦隊（ロシア第2太平洋艦隊、以下ロシア艦隊）発見から主力艦隊の戦闘開始までの状況は次のようなものであった。

「敵の第2艦隊見ゆ」と哨戒中の仮想巡洋艦信濃丸が午前5時に発した電文を5時5分に対馬尾崎湾に停泊していた第3艦隊旗艦厳島が転電し、鎮海湾に停泊していた三笠に伝えた。信濃丸はロシア艦隊に入り込むばかりに近接していたため、発信艦名、発信時刻を入れず本文のみ打電した。信濃丸から鎮海湾には無線電信が直接届かず、対馬にいた厳島が中継する必要があった。三笠は中継した厳島に対し「敵艦隊の位置を示せ」と5時20分に返電した。第1艦隊第3戦隊旗艦の笠置を発見艦と誤認した厳島は、5時40分に三笠からの指令を笠置に転電した。笠置はこの時点でロシア艦隊を発見していなかったため、この問いに答えなかった。しかし、巡洋艦秋津洲が5時50分に信濃丸の続報「敵は東水道を通過するものの如し」を転電し、さらに6時6分厳島が同じく信濃丸の続報「敵艦隊 203 地点午前5時」を転電した。このためロシア艦隊のおおよその動向を把握できた。笠置は、ロシア艦隊を10時30分まで発見できず、8時45分に「まだ敵と接触を保たず」と誤解を解いた。このように混乱した中、巡洋艦和泉は6時45分にロシア艦隊を発見、7時5分に「敵は今 225 地点 5 隻以上針路北東」と打電、以後、和泉からの適切な報告により、連合艦隊主力はロシア艦隊を迎え撃つ態勢を構えることができた。吉田は、第3戦隊の搜索活動の不適と、中継した第3艦隊司令部が発信艦を笠置と誤認したことにより、約2時間にわたり通信上の混乱が続いたとしている。

防衛省防衛研究所には、『極秘 三十七、八年海戦史』（以下『極秘海戦史』）に加え、日露戦争史編纂史料（⑪戦役等一日露）に戦時日記、戦闘詳報が残されている。『極秘海戦史』の備考文書には各艦隊、各戦隊、各艦の戦闘記録が収められている。信濃丸、厳島、笠置の戦闘詳報には詳細な無線交信状況が記載されておらず、正確な交信状況の再現は困難であるものの、笠置と同じ第3戦隊の千歳、新高の戦闘詳報、厳島と同じ第5戦隊の橋立、三笠と行動をともにした第1戦隊の日進の戦闘詳報などに詳細な記録がある²⁾。各艦の記録を比べると、発信時刻、発信艦、電文まで、異なるものが目立つが、これらの史料から可

能な限り交信状況の復元を試みる。

2. 信濃丸によるロシア艦隊発見と各戦隊の行動

1905年5月27日未明、白瀬一城列島を結ぶ第4警戒線上の右幹線上に第6戦隊の巡洋艦和泉、中央幹線上に第3戦隊の巡洋艦笠置、千歳、新高、音羽、左幹線上に第6戦隊の巡洋艦秋津洲が、その南西側に4隻の仮装巡洋艦が、南側から満州丸、信濃丸、佐渡丸、亜米利加丸が、対馬島南側に第7戦隊の2等戦艦扶桑が哨戒中であった。

さらに哨戒艦から根拠地への無線電信を確実にものとするため、中継艦として第7戦隊の砲艦高雄が配備されていたが、任務を解かれ、尾崎湾に帰港途上にあった。中継艦の任務は「根拠地ニ於テ応信ナキトキニ限り中継ヲナスヘシ」であった。

主力部隊の第1戦隊、第2戦隊は第4戦隊とともに加徳水道にあり、旗艦の三笠は、有線電信により東京の大本営との連絡が可能であった鎮海湾に停泊中であった。また対馬の尾崎湾には第3艦隊の第5戦隊と第6戦隊、第7戦隊の一部が停泊中であった。哨戒艦の発した電文は厳島などの中継により、三笠に届けられた。

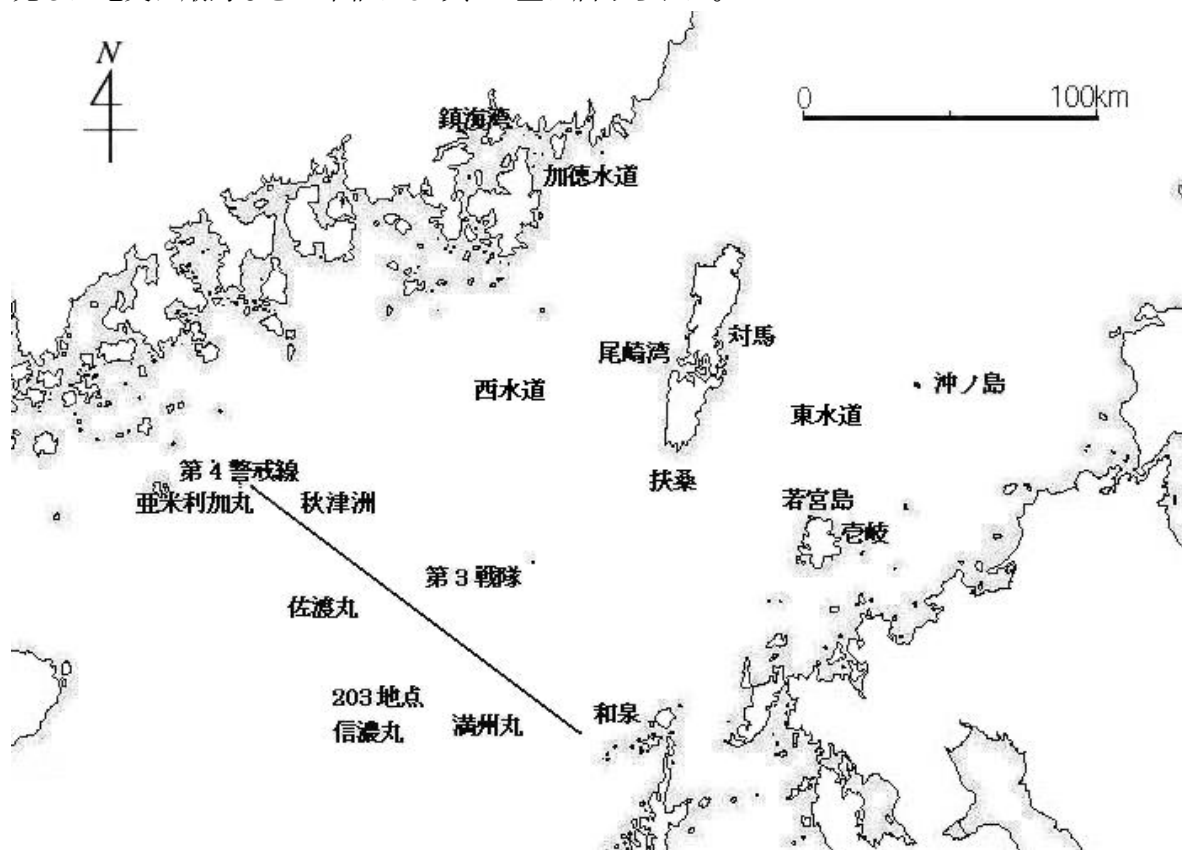


図1 ロシア艦隊発見時の哨戒態勢

『極秘海戦史』第2部 戦紀 巻2 及備考文書付表付図 第1号 日本海海戦当日朝敵艦発見時ニ於ル哨艦配備図を元に作成

哨戒艦の任務は、「敵ヲ発見セハ規定ノ無線電信緊急信号ヲ以テ敵ノ所在竝ニ進行方向等ヲ通報」である。「敵ハ 471 地点ニ在リ南東 1/2 南ニ進ム」は、地点信号 モ 471、方位信号 メ BP と定めた。無線電信符号で、「敵ノ第 2 艦隊見ユ」は「タ」であり、「敵ハ対州東水道ニ向フガ如シ」は「ヒ」である。「敵ノ第 2 艦隊 203 地点ニ見ユ」ならば、「タ」を連続送信し、「タタタタ モ 203」となる。哨戒艦からの連絡を受信したときは、受信艦は応答信号を送る手順であり、中継の場合は、中継の電文が、応答信号を兼ねた。応答信号が確認できない場合、付近を航行中の僚艦が、受信した電文を旗信で宛先の艦に伝えている。

地点番号は、連合艦隊が通信を簡便明瞭に行うため、朝鮮半島から日本海にかけて、緯度、経度 10 分毎に付けた 3 桁の数値である。203 地点は北緯 33 度 20 分、東経 128 度 10 分である。緯度 10 分で 10 海里（1 海里は約 1.85km）、北緯 35 度付近では経度 10 分で 8 海里強の距離となる。当日午前 5 時時点では、視界約 5 海里程度とあり、隣接する地点でも視認は困難な状況であった。図 1 の元史料「哨戒配備図」から地点番号を列挙したものが図 2 である。

北緯35度	-	朝鮮半島				-	鎮海湾 加徳水道		440	441	442	443	444	445	446
	-	-	-	-	-	巨済島	420	421	422	423	424	425	426	427	
	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	
	374	375	376	377	378	379	380	381	382	対馬	383	384	385	386	
	353	354	355	356	357	358	359	360	対馬	361	362	363	364	365	
	327	328	329	330	331	332	333	対馬	334	335	336	337	338	339	
北緯34度	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	
	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	壱岐	281	282	283	
	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	
	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	-	-	-	
	202	203	204	205	206	207	208	209	210	-	-	-	-	-	
	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	-	九州	-	-	
北緯33度	164	165	166	167	168	169	170	中通島	171	172	-	-	-	-	
	東経128度				東経129度				東経130度						

図 2 対馬周辺海域の連合艦隊地点図

三笠と行動をともにした日進の戦闘報告³⁾を元にした無線電信交信表を表 1 とした。ほぼ同内容を、主力部隊である第 1 戦隊、第 2 戦隊が受信できたものとみなせる。

三笠が得たロシア艦隊発見の第一報は、5 時 5 分に厳島が中継した、「敵ノ第 2 艦隊見ユ」である。厳島は、信濃丸が打電した位置情報「203 地点」を受信できず、敵発見のみを打電した⁴⁾。発見位置が伝わらなかったため三笠は 5 時 20 分「敵艦隊ノ位置ヲ示セ」と厳島に打電した。吉田が明らかにしたように厳島は当初、発見した艦を把握できていなかった。厳島と同じ第 5 戦隊の橋立の戦闘詳報には、厳島が 5 時 43 分に第 5 戦隊各艦宛てに問い合わせた「敵艦隊ノ位置及ヒ発信艦ノ名前分カラスヤ」という記録が残されている。この問いに対し橋立は、「地点 225、北東 1/2 北信濃丸ト判読セリ」と、信濃丸が地点番号および進行方向を打電した旨を答えている。地点 225 は、後に、7 時過ぎに和泉が敵艦隊発見を打電したときの場所であり、橋立がこの時点で誤って判読したか、記録した可能性が高い⁵⁾。三笠から敵艦隊の位置を問われた厳島は、笠置あてに 5 時 22 分に続き同 40 分前後に再度同文を打電した⁶⁾。厳島から第 5 戦隊各艦への照会は、笠置からの応答が無かったために行ったものと思われる。

表 1 日進記録を元にした日本海海戦無線電信表

番号	発信時刻	発信艦	電文	受信艦
1	505	敵島	敵ノ第二艦隊見ユ	三笠
2	520	三笠	敵艦隊ノ位置ヲ示セ	敵島
3	532	信濃丸	敵艦隊ハ対州東水道ヲ通過セントスルモノノ如シ	笠置
4	605	敵島	敵艦隊午前5時地点203	三笠
5	615	信濃丸	35隻以上目撃ス<15隻以上の誤リ>	
6	620	笠置	敵情明ナラス病院船1隻東方地点225<地点224の誤リ>	敵島
7	657	笠置	今敵艦隊ノ位置ヲ示セ	信濃丸
8	705	和泉	敵ハ今地点225、5隻以上午前7時	
9	710	信濃丸	<濛気アリ見失フ>第3艦隊の位置ヲ示セ<前半欠落>	笠置
10	730	和泉	敵艦隊11隻以上「ジエムチウグ」先頭後尾病院船2隻地点225	
11	740	笠置	吾レ206地点	信濃丸
12	747	須磨	神埼に來レ	和泉
13	755	和泉	地点278北東微東速力12節	
14	808	敵島	敵艦隊ト接触ヲ保テ	和泉
15	825	三笠	敵ト接触ヲ保チ其ノ針路ヲ知ラセヨ	笠置
16	830	笠置	第3艦隊251地点速力16針路北東微東	敵島
17	833	和泉	「ジエムチウグ」単独前進シ針路東地点251	敵島
18	842	三笠	敵ノ位置及ヒ進行方向如何	笠置
19	842	笠置	未タ敵ト接触ヲ保タス吾神埼ノ南南西25海里速力16節針路北東微東	三笠
20	847	三笠	敵ノ主力見ユルヤ	笠置
21	858	和泉	敵艦隊地点277ノ南東ニ在リ針路東北東	三笠
22	952	和泉	敵ノ兵力ハ戦艦5隻2等巡洋艦3隻共ノ他艦船8隻以上アリ総数22隻以上濛気アリ判	敵島
23	958	三笠	吾午前9時40分対馬韓埼ノ北東10海里ヨリ地点386ノ南速力14節、和泉二分レリ	敵島
24	1007	敵島	敵ハ対州東水道ヲ通過セルモノノ如シ敵ノ兵力ハ戦艦5隻2等巡洋艦3隻共ノ他艦船8隻以上アリ総数22隻以上見ユ濛気アリ分明ナラズ	三笠
25	1024	敵島	吾鵜知ノ南方15海里	三笠
26	1030	三笠	敵艦隊変針セ直ニ報知セヨ	敵島
27	1035	敵島	敵ハ今吾岐若宮島ノ西方約10海里針路東北東	三笠
28	1050	和泉	敵ノ兵力ハ15隻「ボロヂノ」型4隻「オスラーピア」「シソイ・ウエリーキー」、「ナワリン」、「アドミナル、ナヒーモフ」左翼列「アドミナル、セニヤール井ン」型3隻、「インペラートル、ニコライ」第3世、「オレーグ」、「アウローラ」ノ順序ナリ、「ジエムチウグ」型前衛後続部隊仮装巡洋艦	三笠、敵島
29	1056	敵島	敵艦隊速力12節針路東北東	三笠
30	1100	三笠	敵ノ右翼主力ナルヤ	敵島
31	1105	敵島	左翼主力カト認ム	三笠
32	1110	三笠	和泉ニ問合セ	敵島
33	1113	笠置	敵ハ我カ艦隊ノ現位置ヨリ南東7海里ニ在リ吾岐若宮島ノ北10海里	三笠、敵島
34	1115	敵島	敵ノ主力ハ右翼ナリヤ	和泉
35	1123	和泉	左様右翼ノ先頭ト思フ	三笠
36	1145	和泉	午前11時30分先頭艦吾岐若宮島ノ西北約12海里ノ北東ニ在リ、北東微東ニ進行ス	三笠
37	1150	敵島	敵針路ヲ北北東ニ変ス次テ取り消シ	三笠
38	1158	笠置	右翼列主力「ボロヂロ」型5隻次ニ「シソイ、ウエリーキー」、「ナワリン」、「ナヒーモ	三笠
39	1200	三笠	敵ノ位置及ヒ進行方向如何	笠置
40	1203	三笠	吾今地点386ノ南針路南東1/2南速力14節	敵島
41	1215	敵島	第6艦隊敵艦隊ノ前方ニ出テ接触ヲ保テ	須磨
42	1224	和泉	敵艦隊午前12時吾岐若宮島ノ北12海里ヲ北東微東	三笠
43	1225	敵島	吾地点363(沖ノ島ノ西30海里)ヲ東微南	三笠
44	1230	笠置	敵艦隊若宮島ノ北10海里ヲ東北東展望5海里	三笠
45	1233	須磨	敵ノ針路北北東	三笠
46	1240	笠置	敵艦隊変針針路北東若宮島ノ北10海里	三笠
47	1245	笠置	敵艦隊又針路東北東	三笠
48	1303	敵島	吾沖ノ島ノ西約10海里針路北敵ノ南南西1/2西約5海里ニ見ル	三笠
49	1310	笠置	敵ハ沖ノ島ノ南西約20海里針路北北東	三笠
50	1317	敵島	位置ヲ示セ	三笠
51	1320	三笠	敵ハ其ノ艦ノ何レニ在リヤ	笠置
52	1320	三笠	沖ノ島ノ北北西約10海里	敵島
53	1330	和泉	敵艦隊沖ノ島ノ南西約20海里ノ北東ニ在リ針路北東	三笠
54	1335	敵島	敵艦隊ハ本艦ヨリ南1/2西約6海里	三笠
55	1342	須磨	敵艦隊(機械取外ノ為メ不明)7海里吾地点363ノ東	三笠
56	1345	笠置	敵ハ南西5海里ニ在リ	三笠

*番号、< >のコメントは筆者が付したものの。

**節はノット、1ノットは毎時約 1.85 キロメートルである。

5 時 55 分発の「敵ハ東水道ヲ通過スルモノノ如シ」の電文は、三笠のように秋津洲電とする記録と、第 2 戦隊の装甲巡洋艦、八雲、磐手のように笠置電とする記録がある。日進は、この中で 5 時 32 分に直接信濃丸の発した電文が判読できたようである。第 4 戦隊の巡洋艦、明石の記録には、「敵島、秋津洲ノ諸艦ハ皆同様ニ告グ」とあり、応信が確認できなかったため、複数の艦が同文を中継打電した模様である。

断片的な情報が行き交う中、6 時 5 分に「敵艦隊午前 5 時地点 203」と敵島が打電したのは、この時点まで三笠にロシア艦隊の位置が伝わっていなかったもので、適切であった。この電文は、6 時に笠置が敵島に打電した内容を転電したものである⁷⁾。203 地点から東水道（対馬海峡）に向かえば、当初予想通り、午後早い時間に沖ノ島付近で会敵すると想定可能である。この間信濃丸は 5 時 20 分に一旦敵影を失い、6 時 5 分に再発見し⁸⁾、「15 隻以上目撃ス」と打電した。この電報を受け、笠置は 6 時 10 分、「今ノ敵艦隊ノ位置ヲ示セ」と信濃丸に打電した⁹⁾。これは最新情報の把握と同時に、第 3 戦隊もいち早く接敵するための問いである。笠置は 6 時 20 分、ロシア艦隊の病院船を発見、「敵病院船 1 隻東方ニ見ユ地点 224」と敵島に打電した¹⁰⁾。笠置は、南方に煤煙があることから、さらに南東に航行した。

3. 和泉による敵情報報告

笠置が病院船を発見した 6 時 45 分頃、和泉がロシア艦隊を発見、7 時 5 分に「敵ハ午前 7 時ニ 225 地点ニアリ針路北東 5 隻以上」と打電した¹¹⁾。一方、信濃丸は再びロシア艦隊を見失い 7 時 10 分「濛気アリ見失フ第 3 戦隊位置ヲ示セ」と打電、笠置は 7 時 40 分「吾レ 206 地点」と返電した¹²⁾。

和泉の戦闘報告には、「本艦ハ信濃丸ノ位置報告ニヨリ午前八時頃敵艦隊ニ会スルモノト想像シアリシニ スク早く之ヲ発見セシハ蓋信濃丸昨日ノ強風ノ為メ艦位稍正確ヲ欠キタルモノナルヘシ」とある¹³⁾。また笠置の戦闘報告には、千歳から笠置に対し 8 時 16 分発の「貴艦位置ハ潮流ヲ差入セラレシヤ」という問いと、笠置の「先程ノ無線電信ノ位置ハ 207 地点ト云フ方近シ天測ニ拠ル」との答えが残っている¹⁴⁾。信濃丸の 203 地点、笠置の 206 地点とも艦位測定が不正確であり、笠置が敵艦隊の捕捉に時間がかかった要因となっている可能性がある¹⁵⁾。

この前後、第 3 戦隊の千歳と新高が意見上申をしている¹⁶⁾。千歳は、7 時 5 分に笠置に対し手旗信号により「意見上申一先ヅ東方ノ搜索ノ後南ニ向ハシテハ如何」と伝えた。さらに新高も 7 時 6 分笠置に対し「203 地点ヨリ東水道ニ向フト信濃丸ノ情報ニ拠レハ先ノ病院船ハ敵の後尾ニ続航スルモノト思ワル意見上申」と手旗信号を送った。笠置の戦闘詳報によれば、千歳は 7 時 3 分、新高は 7 時 25 分に意見上申したとなっている。この時間帯には和泉からの第一報が打たれている。千歳、新高の意見上申のタイミングは微妙であるが、いずれにしろ両艦は 6 時に病院船を発見したときから、南東方向ではなく病院船を追跡し北東を探索するべきと判断していた。

信濃丸がロシア艦隊を見失い、第 3 戦隊が接敵できない中、和泉は単独でロシア艦隊の動向を伝え続けた。7 時 5 分の打電に続き、7 時 30 分「敵艦隊 11 隻以上ジエムチウグ先頭、

後尾ニ病院船 2 隻 225 地点」、7 時 55 分に「277 地点針路北東微東速力 12 節」と次々報告した¹⁷⁾。7 時 55 分発の和泉電は、三笠と日進の受信記録に残されている¹⁸⁾。日進の記録には 7 時 5 分の和泉電の受信もあることから、8 時前までには、三笠と和泉間で直接交信が可能となっていたものと推測できる。三笠は加徳水道を出た 420 地点付近を航行中であった。420 地点と 277 地点とは 70 海里強であり、通信可能な距離であった¹⁹⁾。笠置の電文を中継した厳島に対し、三笠が 8 時 42 分に打電した「直接分レリ」との電文が残されている²⁰⁾。

笠置は 8 時 30 分「第 3 戦隊 251 地点速力 16 針路北東微北」と打電した。和泉は 8 時 33 分に「ジエムチウグ単独ニテ前進ス針路東 251 地点」と打電した。同じ 251 地点である。三笠が、笠置がロシア艦隊と接触中との判断をしていたのは、ロシア艦隊発見から 3 時間経過しており、当然接触済みと考えたほか、笠置の伝える位置が、和泉の伝えるロシア艦隊の位置と近接していたからである。7 時過ぎに和泉がロシア艦隊 225 地点と打電した直前の 6 時 45 分に笠置は敵病院船 224 地点と打電している。笠置はさらに 7 時 40 分に「吾 206 地点」と打電している。206 地点は 225 地点の北側に隣接する地点である。

10 時前に、厳島もロシア艦隊を確認した。それより早く 9 時過ぎに第 4 駆逐隊がロシア艦隊を確認していた。同隊は、本来第 3 戦隊とともに哨戒につく予定であったが、風浪が強いため、尾崎湾で待機中、ロシア艦隊発見の報を受け、6 時過ぎに出港、ロシア艦隊に遭遇し、厳島を誘導したのである。

4. 10 時以降の敵情報告

10 時台になると、ロシア艦隊の兵力、隊列、進行方向など詳細な情報が交わされ、緊迫度が増す様子が垣間見える。三笠は、ロシア艦隊の針路変更に加え、戦力、隊形に関する情報を求めた。10 時 30 分三笠発厳島あて「敵艦隊変針セハ直ニ報知セヨ」、11 時に厳島あて「敵ノ右翼主力ナルヤ」、12 時の笠置あて「敵ノ位置及ヒ進行方向如何」と定期的に情報を求めた。

10 時 50 分和泉は、三笠、厳島に「敵ノ兵力ハ 15 隻・・・」の電文（表の 28 電）を打った。厳島は同 56 分、三笠にあて「敵艦隊速力 12 節針路東北東」と打電した。吉田が明らかにした旗艦三笠が和泉の情報を信頼していたことを示す交信は、この直後なされた。三笠が厳島の「左翼主力ト認ム」という報告に対し、和泉に確認するよう促した内容である。表の 32 電から 37 電である²¹⁾。

この時点では、和泉と三笠間では問題無く直接の無線交信が可能であり、和泉の交信記録には、上の電文全てが記録されている。11 時の時点で、三笠が和泉に直接確認すれば済むところを、厳島を中継して交信したのは、全艦隊での情報確認の意味とともに、厳島公認のもと、和泉からの報告を引き続き求めたという意図もあっただろう。

この間、11 時前に第 3 戦隊もロシア艦隊を視認し、11 時 13 分三笠と厳島に宛て「敵ハ我ガ艦隊ノ現位置ヨリ南東 7 浬ニ在リ吾壱岐若宮島ノ北方 10 海里」と打電した。和泉、厳島、笠置 3 艦のロシア艦隊の位置報告が微妙に異なったのは、この時点以降である。

11 時 55 分に三笠艦上で行われた総員への訓示では、無線で伝えられた陣形、艦名を詳細

に説明し、1 時間ほどで接敵するものとみている。12 時の時点で三笠は 385 地点、ロシア艦隊は 307 地点、距離は 30 数海里であった。連合艦隊主力は 12 時 26 分に 14 ノットから 12 ノットに減速し、一方のロシア艦隊は 9 ノット航行中であった。三笠は午後 1 時 15 分に第 3 戦隊、同 28 分に第 5 戦隊を視認した。三笠は同 20 分、笠置に「敵ハ其ノ艦ノ何レニ在リヤ」と打電した。厳島は同 35 分「敵艦隊ハ本艦ノ南 1/2 西約 6 海里」と三笠に打電、三笠は、同 1 時 39 分にロシア艦隊を確認した。笠置の返電「敵ハ南西 5 海里ニ在リ」は同 45 分であった。このとき展望は 8、9 海里であり、同 55 分、三笠は Z 旗を掲げた。

5. まとめ

これまで見てきたように、日本海海戦時の無線電信の交信状況は、安定していたものではなかった。たとえば、8 時 58 分の和泉発三笠宛の電文「敵艦隊地点 277 ノ南東ニ在リ針路東北東」は応答信号がなかったためであろう、日進が三笠にあて 9 時 23 分に旗信で送っている。さらに、千歳 10 時 40 分笠置宛の「厳島ヨリ三笠ヘノ敵ノ位置ノ電分リシヤ」との信号もある。加徳水道で待機中であった八雲は 5 時 5 分の厳島の敵艦隊発見の電文を発信艦、受信艦不明と記録している。当日臨時に西方中継艦の業務からの帰途対馬沖にあった砲艦高雄に至っては、中継業務を担っているにもかかわらず、ほとんど受信できていなかった模様である。各艦の設備、調整状況、場所により受信状態は不安定であった。

このような状況のもと、各艦の交信記録が異なっているのは、次の理由が考えられる。

1. 発信艦が数回同じ電文を打電している事例があり、時刻が異なる
2. 同文を複数の艦が中継しているため、受信艦により中継艦の記録が異なる
3. 中継艦ではなく元の発信艦を記録している事例がある
4. 単純に発信艦、中継艦を誤認した事例がある
5. 発信時刻、受信時刻の定義あるいは各艦の時計の誤差によるもの

これらに加え、単純な記録上の誤りも散見する。

当時の無線電信はこのように安定性を欠いたものであり、連合艦隊は、無線電信による交信を単純明瞭にするため、開戦以来利用していた無線電信略符号に加え、予想される戦闘海域に地点番号を付けて、ロシア艦隊の来航に備えた。

26 日早朝、前日にロシア義勇艦隊が上海外港の呉淞に入港した情報を得て、対馬海峡の警備を強化した。実際には 4 列に留まったが、哨戒態勢を 4 列（仮装巡洋艦 4 隻）から 5 列に増加を命じ、最速の第 3 戦隊を第 4 警戒線の中央に配置した。さらに「本日展望自在ナラズ」と、和泉、秋津洲を追加配備した。この措置が功を奏し、信濃丸が敵影を見失い、第 3 戦隊が接敵に失敗したあと、幸いにも和泉が自身の予想より早く接敵に成功した。

東郷平八郎連合艦隊司令長官は、その戦闘報告で、策敵にあたった各部隊を、第 3 戦隊を含めて、リーダーに相応しく、「終始能ク之ト接触ヲ保持シ」と称賛した、しかしこれは、多く論じられているように、経験が生かされなかった一因でもある。

第 3 戦隊は、戦力分散というデメリットもあるが、千歳、新高の意見上申のように、少なくともその一部を病院船発見時に追跡させるべきではなかったのか。この点、本来同行

する予定であった第 4 駆逐隊が荒天のため尾崎湾で待機していたことも影響しているだろう。さらに対馬南方には、旧式で最大速力 13 ノットの扶桑ではなく、快速の巡洋艦を配置して、第 3 戦隊が接敵に失敗した場合のバックアップの任務を賦与しておくべきではなかったかなどの疑問が残る。また 5 列哨戒の命が出されていたにもかかわらず、一時北進の準備をした影響などで 4 列のままであった。

5 海里程度という限られた展望、未熟だった無線電信という条件のもと、対馬海峡という限られた海面での戦闘というメリットをいかし、連合艦隊は、歴史的勝利を収めたが、後に策敵活動に生かすべき戦訓は、『極秘海戦史』の中にも残されなかった。

註

- 1) 吉田昭彦「日本海海戦における通信」『軍事史学』17 (1) (1981 年 6 月) p.55-63、中村治彦「日本海海戦：その情報通信からの視点：4—皇国の興廃を賭けた情報通信網と木村駿吉—」(『太平洋学会誌』第 94 号 (2005 年 5 月) p.87-110
- 2) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C05110084800: 海軍軍令部編『極秘 明治三十七、八年海戦史』第 2 部 戦紀 巻 2 備考文書第 1 (防衛省防衛研究所)
- 3) JACAR, C05110085700: 同上書、備考文書 1 第 7 号 日進艦長海軍大佐竹内平太郎の提出せる軍艦日進日本海海戦戦闘報告
- 4) 中名生正己は、「日本海海戦 連合艦隊完勝の 2 日間」『世界の艦船』(2005 年 5 月) p.85 で、当初信濃丸は、地点番号を打電せず、笠置の問い合わせにより「地点 203」を返電したとしている。
- 5) JACAR, C05110088600: 『極秘海戦史』、第 2 部戦記巻 2 備考文書第 2、第 32 号 橋立艦長海軍大佐福井正義の提出せる軍艦橋立の日本海海戦に於る戦闘報告。橋立の記録には、さらに 6 時 2 分に敵艦は「敵艦隊地点二二五東水道ヲ通過セントス」と総艦あてに打電したとあり、ここでも 225 地点となっている。
- 6) JACAR, C09050263500: 日露戦役、日本海海戦、第 3 艦隊戦闘詳報 (8)。第 3 艦隊戦闘詳報には、『極秘海戦史』備考文書に掲載されていない須磨、和泉などの無線電信表がある。
- 7) JACAR, C09050263600: 同上書、第 3 艦隊戦闘詳報 (9)
- 8) JACAR, C05110090000: 『極秘海戦史』備考文書 2、第 47 号 信濃丸艦長海軍大佐成川揆の提出せる仮装巡洋艦信濃丸の日本海海戦に於る戦闘報告
- 9) 前掲、第 3 艦隊戦闘詳報(8)。日進ではこの電文を受信できなかったようである。
- 10) 日進の記録では 225 地点となっているが、音羽、秋津洲など他艦は、224 地点と受信している。
- 11) JACAR, C05110089100: 同上書、備考文書第 2、第 37 号 和泉艦長海軍大佐石田一郎の提出せる軍艦和泉日本海海戦に於る戦闘報告によれば和泉の打電は 7 時である。
- 12) 前掲、第 3 艦隊戦闘詳報(8)。笠置の記録では 7 時 18 分発である。同文を数回打電した可能性が高い。
- 13) 前掲、和泉艦長海軍大佐石田一郎の提出せる軍艦和泉日本海海戦に於る戦闘報告。
- 14) JACAR, C05110086900: 同上書、備考文書第 1 第 19 号 笠置艦長海軍大佐山屋他人の提出せる軍艦笠置日本海海戦戦闘報告
- 15) 吉田は、笠置、和泉、敵島の報告位置の相違を艦位測定が不正確だったためとしている(前掲「日本海海戦における通信」p.59-60)
- 16) JACAR, C05110087000: 『極秘海戦史』、備考文書第 1 第 20 号 千歳艦長海軍大佐高木助一の提出せる軍艦千歳日本海海戦戦闘報告、JACAR, C05110087100、:同書、第 21 号 新高艦長海軍大佐莊司義基の提出せる軍艦新高日本海海戦戦闘報告。新高の同報告、電報及ヒ信号の記録では 7 時 10 分発となっている。
- 17) 日進の記録では 278 地点であるが、和泉などの記録では 277 地点である。
- 18) 前掲「軍艦日進日本海海戦戦闘報告」、JACAR, C05110085200、第 2 号 三笠艦長海軍大佐伊地知彦次郎の提出せる軍艦三笠日本海海戦戦闘報告。三笠の記録では地点 237 となっている。
- 19) JACAR, C05110110100: 『極秘海戦史』、備考文書第 28 号其の 8、其の 9
- 20) JACAR, C09050263600: 日露戦役、日本海海戦、第 3 艦隊戦闘詳報 (9)
- 21) 敵島の「左翼主力ト認ム」は、和泉の記録には「左様主力ト認ム」と記録されている。三笠記録では和泉の回答を「左様左翼先頭ト思フ」と記録している。